The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説(一)
Author(s)	佐野, 大介
Citation	懐徳堂研究. 2012, 3, p. 111-123
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/24642
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（一）

佐野大介

一、解説

はじめに

近年、井上了・池田光子両氏の行なった大阪大学附属図書館懐徳堂文庫の整理・調査によって『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』なる資料の存在が明らかにされた。一帙に原稿用紙を仮綴した五冊の抄本を収めており、表紙題簽等は附されていないが、一行目にそれぞれ「正教訳語改定上ノ私見」・「聖母原罪有無論」・「第一月一日聖六尾西利乙ノ伝」・「儒仏耶三教比較結論」・「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麿拝覆ス」（以下「返信1」と略称）・「中井木菟麿再」（以下、「返信2」と略称）と記されている。資料名・書きぶりより一見して草稿であると見てとれる。

著者の中井木菟麻呂は、中井桐園の長子で並河寒泉の外孫。幼いころより祖父や父より漢学の薫陶を受けた。明治一一年（二三歳）にロシア正教に入信、後、ニコライ大主教を助けて聖書の翻訳に携わり、「ニコライ主教の翻訳協力者」として知られる。洗礼名はパウェル中井木菟麻呂。自身がいうように、「本儒門より来りて正教に帰順したる」（「返信1」）・「儒門より出でて正教に帰せし」（「返信2」）人物だといえる。

明治六年の切支丹禁制の高札撤去より、我邦においても公に各キリスト教の布教が行なわれるようになっていった。そうして入信した者たちにおいて、キリスト教の教えと従来の考えとの相違点や、また従来の宗教・道徳との関係において、葛藤やその超克があったであろうことは想像に難くない。当時のキリスト者、特に木菟麻呂のような儒教からの入信者のこれらの問題に関する思

考について明らかにすることは、我邦近代のキリスト教受容について考える上で重要な意味を持つといえよう。

資料のうち、儒者からの質問状に答えた「返信1」・「返信2」、儒教・仏教・キリスト教の三教を比較してその優劣を論じた「儒仏耶三教比較結論」には、木蒐麻呂の儒教とキリスト教との関係についての考え方が現れており、木蒐麻呂の思想とともに、明治期キリスト者の思想を考える上でも重要な文献であるといえる。

そこで、「『中井木蒐麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説」と題して、上記三資料の翻刻に解説を附し、世に紹介する。本稿はその（一）で、「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木蒐麿拝覆ス」の翻刻・解説であり、以下、「中井木蒐麿再」（『中井木蒐麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（二））（『懐徳堂研究』第四号、二〇一三年掲載予定）、「儒仏耶三教比較結論」（『中井木蒐麻呂キリスト教関係草稿類』翻刻と解説（三））（『懐徳堂研究』第五号、二〇一四年掲載予定）と続く。なお、これら三資料は拙稿「中井木蒐麻呂における儒教とキリスト教との関係」（『懐徳堂研究』第三号（本誌）、二〇一二年）で検討の対象とした資料群であり、互いに相補完するものである。本稿と併せ参考して頂ければ幸いである。

一―一、資料作成時期について

「返信1」は、久保田啓十郎なる人物が発した質問状に対する返書の草稿であり、「返信2」はさらにその返答に対する再反論に対する返書の草稿である。

「返信1」文頭にこの書信が記された経緯が示されている。

大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木蒐麿拝覆ス。久保田啓十郎君座右　貴下ハ四月十日神田青年會館ニ於ケルニコライ大主教ノ演説ニ關シテ、質サント欲スル所アリ。其十五日請教書一篇ヲニコライ大主教ニ郵寄シテ答ヲ求メラレタリ。ニコライ大主教ハ尊書ヲ捧讀スルコト一過、深ク　貴下ガ至誠ニシテ道ヲ求ムルニ急ナルニ感激シ、僕ガ本儒門ヨリ来リテ正教ニ歸順シタルヲ以テ、時ニ僕ニ命ジテ尊意ニ奉答セシメラル。

これによれば、ニコライ大主教の演説内容に不満を持った久保田が質問状を寄こし、それに対して、ニコライが木蒐麻呂に返答を命じたということであったらしい。さ

らに、「返信2」冒頭部には、

貴下ハ僕ガ五月十四日ヲ以テ送上セシ覆翰ニ對シテ更ニ質疑辨明セラルル所アリ。其二十二日ヲ以テ第二書ヲ辱ウセリ。

とある。久保田は木菟麻呂の返答に満足せず再度質問状を送り、さらに木菟麻呂がその返答として記したものが「返信2」であることが分かる。また、「返信1」の奥書には「五月十三日」とあり、「返信2」の奥書には「七月二十五日」とあることから、一連のタイムスケジュールが分かる。

ここで、これが何年のことなのかが問題となるが、「返信2」に、

尊書又吾ガ大主教ニコライ師ヲ景慕セラルル情意ヲ開示シ、師ガ新来ノアンドロニク主教ト交代シテ歸國セラルベシトノ風説ヲ聞キテ、深ク以テ遺憾ト為シ給フ意ヲ陳ベラレタリ。……アンドロニク新任主教ハ、ニコライ師ノ後任ト為ルベキ重職ヲ帯ビテ渡来セラレシナリト雖、幾モナクシテ悪性ノ脳貧血症ニ罹リ、風土ノ相違亦大ニ關係スル所アルガ故ニ、醫師ハ切ニ歸國シテ静養スル外ニ治愈ノ方法之ナキコトヲ勸告シタルヲ以テ、終ニ去月十二日ヲ以テ歸國ノ途ニ上ラレタリ。

とある。ここから、この往復書簡のやりとりが、アンドロニク主教が帰国した明治四〇（一九〇七）年であることが分かる。[1] そこで、木菟麻呂の日記『秋霧記』を閲すると、「（引用者注…五月）十四日　火　晴……○発信封書三通　久保田啓十郎宇治覆書」（『秋霧記』（明治四十年一月権輿）巻十三）、「（引用者注…七月）二十七日　土　晴……○雑事　久保田啓十郎氏ニ答フル書ヲ校シテ之ヲ封ズ明日ヲ以テ之ヲ郵寄スベシ」（『秋霧記』（明治四十年七月権輿）巻十四）とあり、これを裏付ける。[2]

『秋霧記』にはさらに、「九月　一日　日　晴……又開封一通　久保田啓十郎翁駁論」（『秋霧記』（明治四十年七月権輿）巻十四）とある。「返信2」に、「尊書中、今一回質疑ヲ試ミンコトヲ請ハル。何ゾ止一回ノミナラン。唯眞理ノ證明セラレンコトヲ期スルノミ」（「返信2」）とあり、木菟麻呂承知の上で久保田が三通目の質問状を送ったものであろう。ただ、『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』に収められた返信の草稿はこの二つのみで、三通目の返信に関しては未詳。

一―二、内容解説

一―二―一、構造

久保田啓十郎なる人物が発した質問状に対する返書の草稿。原稿用紙仮綴。全八葉。冒頭「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麿拝覆ス」の「中井木菟麿」や文中の「僕」といった語は一回り小さな文字で記されており、「貴下」「尊書」といった語は、改行または語上に空格を配する。また、「ニコライ大主教モ亦　尊書ヲ讀ミテ文辞ニ禮節アルヲ歎賞シテ淳良誠實ノ儒家ナリト為シ、為ニ明答ヲ呈センコトヲ嘱セラルルコト深切ナリ」などとも記しており、論争の書信にあって礼を失さぬよう気を遣っていた様子が窺われる。

内容としては、冒頭に、自身が「本儒門ヨリ来リテ正教ニ帰順シタル」ためにニコライから返書を指示されたことについて述べ、久保田の書翰にあった二つの質問に回答した後、

ニコライ大主教ハ更ニ　貴下ノ芝眉ニ接シテ説明センコトヲ命ゼラレタレドモ、先書ヲ以テ荅フルコト是クノ如シ。爾来多事ニシテ其日ヲ遅クセシヲ恕セヨ。奉状不宣。

五月十三日

と結んでいる。

一―二―二、第一問

第一問について、まず、

尊書ノ第一問ハ、孔子ガ所謂天ヲ以テ基督教ノ造物主、即神ト異ナル所ナシト為シ、『論語』ヲ引キテ之ヲ立證セリ。想フニ　貴下ノ疑點ハニコライ師ガ「神儒佛ハ神ニ對スル渇望ヲノミ起サセタリト雖、此ノ渇ヲ醫スルニ足ル者ニアラズ」トノ意ニ對シテ、儒教モ亦已ニ天ヲ説キタレバ、基督教ヲ俟タズシテ、已ニ神ニ對スル道ヲ盡セリト云フニアルカ。

とある。問題となった講演でニコライが語った内容の詳細については語られていないが、牛丸康夫氏『パウエル中井木菟麻呂小伝』（宗教法人大阪ハリストス正教会、昭和五四年）引くニコライの文章によって、その儒教観の一端を窺うことができる。

人間の魂にとっては、そうした道徳概念に劣らず本質的である様々な理論的な問というものがある。それらの問に孔子は答えてくれるだろうか？ 彼は世界と人間の初めについて、至高者について、人間の使命について教えてくれるだろうか？ 全く否である。よく知られていることだが、そうした問題について弟子たちが尋ねると、孔子は、例えば「われわれは地上のことも知らないのに天上のことを語ったとて何の益があろうか」といった、どっちつかずの返答をしてその場をのがれている。彼が一切の高いものを表わすに使う「天」という言葉の内容は曖昧極るもので、その言葉によって人格的な何かを指しているのか、それとも非人格的なものを意味して使っていたのか、それさえもわからないのである。……孔子は彼らに弁証の武器を授け、彼らの批判精神を育てた。その批判精神によって彼らは、神道は仏教に対して嘲笑あるいは軽蔑の態度を以て臨むようになった。とはいうものの、孔子は彼らがそれまで持っていた信仰心を打ち砕きはしたが、その信仰に代るものは何も与えなかった。（牛丸康夫氏『パウエル中井木菟麻呂小伝』引「宣教的観点から見た日本」（『ロシア報知』第九号、一八六九年））

ここに、儒教がはっきりとした人格的天を説かず、「その信仰に代るものは何も与えなかった」と述べられており、講演の際にも同様の論法を用いたものと考えられる。「返信1」には「論語ヲ引キテ之ヲ立証セリ」とあるが、恐らく久保田はこの様なニコライの見解に対し、

五十にして天命を知る（五十而知天命）。（為政第二）

子曰く、天徳を予に生せり。桓魋其れ予れを如何せん（子曰、天生徳於予、桓魋其如予何）。（述而第七）

顔淵死す。子曰く、噫、天予を喪せり。天予を喪せり（顔淵死。子曰、噫、天喪予。天喪予）。（先進第十一）

などの句を引用して、儒教は天について説く、と反論したものと思われる。

木菟麻呂はこの反論に対して、

貴説ノ如ク、『論』『孟』『易』『詩』『書』中ニ累見スル所ノ「天」、或ハ「皇天上帝」等ノ語ハ、是レ正

シク天ノ至上者萬有ノ主宰ヲ呼籲スル聲ニシテ、人性固有ノ要求ニヨリテ發セシ者ニ外ナラズ。……獨古聖前賢ガ、其靈妙不測ノ功力ヲ称讃シ、幽玄深奥ノ妙用ヲ説明シ、不可見ノ皇天上帝ヲシテ人前ニ昭著ナラシメタルハ、是レ其聰明叡知衆人ニ超エタルヲ以テ、未見ノ上帝ヲ識得スルコト、崇高ニシテ、且明顕ナルニ因ルナリ。

として経書を撰した「古聖前賢」が「天、或ハ皇天上帝」について語ったことを賞賛する一方、

唯其「天」、或ハ「皇天上帝」ノ語義ハ、後儒ガ之ヲ理ナリト解キタルハ、遂ニ古聖賢ガ天ニ對シテ識得セシ所ヲ誤リテ、永ク其眞相ヲ掩没セリ。

などとして、「後学」即ち宋学が「天即理也」と説いたことを強く非難している。続けて、この対応の違いについて、

天トハ意思智能ヲ具有シ、天地統制ノ最大權力ヲ保持シテ、下土ヲ照臨スル者、即活潑潑ノ神靈ニシテ、理トハ神靈ノ意旨ニ適合スル所ノ道ナリ。

と説明する。つまり、天とは「意思智能ヲ具有シ」「権力を保持シ」「下土ヲ照臨スル」「活潑潑ノ神霊」、つまり、人格を持つ存在であって、非人格的な「道」である理とは異なるため、天を「皇天上帝」などと説明する経書は容認するが、「天即理也」といった説明を施す宋学を否定するのである。

ただ、木蒐麻呂は「古聖前賢」（古聖王孔子子思等諸聖賢）は幾らか容認するものの、儒教は本質的に「唯其天啓ノ教ニ非ルヲ以テ、天人相関ノ奥義ヲ説明スルコト能ハ」ない不完全な教えであるために、

僕ハ古聖王孔子子思等諸聖賢ノ天ニ對スル觀念ヲ以テ他ノ儒流ノ見ル所ヨリモ一層神造物主ニ接近シタル者ト為スト雖、其道ヲ行フ大任ニ至リテハ、ニコライ大主教ノ説キタル如ク人ヲ神造物主ニ就カシムルニ至ルマデ指導ノ職ヲ盡シタル師傅ナリト見ルナリ。

と、儒教を劣った教えであるとするニコライの教説が正しいと結論づけている。

一―二―三、第二問

第二問は、

ニコライ大主教ガ演説中ニ儒教ニ於テハ我等地上ノ事ヲ察セザレバ、如何ニシテ天上ノ事ヲ究メントノ意アルコトヲ述ベタルニ對シテ、孔子ガ何人ニ對シテ發セシ者ナルカヲ問ヘリ。

というもので、

是レ「未知生焉知死」ノ語ニ因リテ之ヲ意解セシノミ。

斯ク生トハ生時ノ事ヲ言フ故ニ、地上ノ事ト云ヒ、死トハ死後ノ事及ビ死ノ理由ニ屬ス。是レ固リ人間知ルベカラザル事ナリ。故ニ天上ノ事ト云ヘルナリ。

と回答している。勿論、久保田は本当に「孔子ガ何人ニ対シテ発セシ者ナルカ」が分からなかった訳ではなく、この質問は、ニコライの所説を理解した上でその内容に不満を示したものである。木菟麻呂が、

斯ノ一條ニ至リテハ、實ニ孔子モ亦知ルヲ得ザリシナリ。若シ「孔子ハ至聖ニシテ知ラザル所ナシ、死後ノ事及ビ死ノ所以モ亦之ヲ知レリ。唯妄ニ説カザリシノミ」ト云ハヾ、是レ虚辭ヲ以テ孔子ヲ過稱スル者ニシテ、反リテ先聖尊崇ノ道ニアラズ。

と結論していることから、「孔子は死後の事を知っていた」と主張したものと考えられる。ここで、木菟麻呂が、孔子が死後について「知ルヲ得ザリシ」とする理由は、先と同じく儒教が天啓を受けていない、つまり神の教えではないためである。

最後に、直接自分でキリスト教について学ぶことを勧め、先に挙げたニコライの賞賛の言葉について触れた後、返信の遅延を詫びて「返信1」は終了する。

おわりに

基本的に「返信2」は、「返信1」の内容を敷衍したものであるため、木菟麻呂の意見の大要はこの草稿に現われている。当該稿から以下のような宗教観が見てとれる。

一、儒教の天観を「古聖賢」のそれと「後儒」のそれとに弁別し、「古聖賢」の天観をキリスト教に近いものとして価値を認める一方、「後儒」の理気説による天観を否定する。

二、「天」と「神」とを同一視し、「天」は「意思智能を具有」するような、所謂人格神であるとする。

三、キリスト教と儒教との本質的な違いを、天啓を受けたかどうかに置き、天啓の有無にキリスト教の優越性を認める。

ただ、これらの主張は久保田を納得させることはできず、再度の反論を招き、さらに「返信2」の撰へと繋がることとなる。

二、書誌情報

中井木菟麻呂撰　手稿

〔寸法〕縦二四・五×横一六・五（cm）

〔書式〕朱色で印刷した四周双辺。10行、20～30字。

〔版心〕白口。無魚尾。

〔内題〕「大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麿拝覆ス」（「中井木菟麿」のみ小字）

〔外題〕帙題簽「中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類」

〔奥書〕「五月十三日」

〔印記〕「新田文庫」「79CL00529」「開架図書」

〔装訂〕仮綴。全八葉。

〔備考〕

〔蔵書票〕「E149　天生関係38　365」

三、翻刻

凡例

・底本として、『中井木菟麻呂キリスト教関係草稿類』（大阪大学附属図書館（懐徳堂文庫内新田文庫）蔵、蔵書票E149／天生関係38／365）を用いた。

・翻刻に当っては、底本の文字にできる限り沿うよう留意したが、印刷の都合上改めた箇所もある。

・底本には句読点は付されていないが、読者の便のため句読点を付した。

・底本は草稿であり、ところどころ朱による修正や見せけちがあるが、修正に従った。

・書名に『　』、引用及び発言部に「　」を付した。

・漢籍の引用には（　）にて出典を示した。

・「僕」「僕等」等小字で記されたものは小さいフォントにて示した。

・葉および表裏のくぎりで改行して注記を付した。

大主教ニコライ師ノ命ヲ奉ジテ中井木菟麻呂拜覆ス。

久保田啓十郎君座右　貴下ハ四月十日神田青年會館ニ於ケルニコライ大主教ノ演説ニ關シテ、質サント欲スル所アリ。其十五日請教書一篇ヲニコライ大主教ニ郵寄シテ答ヲ求メラレタリ。ニコライ大主教ハ尊書ヲ捧讀スルコト一過、深ク　貴下ガ至誠ニシテ道ヲ求ムルニ急ナルニ感激シ、僕ガ本儒門ヨリ来リテ正教ニ歸順シタルヲ以テ、時ニ僕ニ命ジテ尊意ニ奉答セシメラル。僕未一タビモ顔色ヲ奉ズルヲ得ズト雖、恭シク片楮ヲ修シテ數言ヲ覆シ奉ル［一表］

ニコライ師、言ヲ傳ヘシメテ曰ク、「余ハ孔子ノ德億兆ニ超エ、化萬方ニ及ブヲ疑ハズ。深ク斯道ヲ尊崇シテ、照闇ノ光明啓蒙ノ指針ト為セリ。然レドモ其吾ガ惟一真神ノ教ニ於ケルヤ、相對比スベキ者ニアラズシテ、唯其前驅啓導ノ任ヲ盡シシノミ。故ニ余ハ其教ガ吾ガ基督教ト相悖ラザルノミナラズ、亦其人衆ヲ啓導シテ、基督教ニ就カシムル師傅タリシコトヲ悦ブ。請フ斯ノ意ヲ致セ」ト。

尊書ノ第一問ハ、孔子ガ所謂天ヲ以テ基督教ノ造物主、即神ト異ナル所ナシト為シ、『論語』ヲ引キテ之ヲ立證セリ。想フニ　貴下ノ疑點ハニコライ師ガ「神儒佛ハ神ニ對ス［一裏］

ル渇望ヲノミ起サセタリト雖、此ノ渇ヲ醫スルニ足ル者ニアラズ」トノ意ニ對シテ、儒教モ亦已ニ天ヲ説キタレバ、基督教ヲ俟タズシテ、已ニ神ニ對スル道ヲ盡セリト云フニアルカ。

尊書ニ引證スル所ノ語中ノ句ハ、僕等ガ基督教ガ敢テ孔教ト相悖ル者ニアラザルコトヲ證スル為ニ屢引用セシ所ナリ。　貴説ノ如ク、『論』『孟』『易』『詩』『書』中ニ累見スル所ノ「天」、或ハ「皇天上帝」等ノ語ハ、是レ正シク天ノ至上者萬有ノ主宰ヲ呼籲スル聲ニシテ、人性固有ノ要求ニヨリテ發セシ者ニ外ナラズ。人類ハ孤立スルモノニアラズシテ、天地萬物ノ上ニハ必主宰者アリトハ、人性ノ自然ニ感想スル所ナリト［二表］

雖、庸人ハ漠然トシテ臆測スルニ過ギズ。獨古聖前賢ガ、其靈妙不測ノ功力ヲ称讃シ、幽玄深奥ノ妙用ヲ説明シ、不可見ノ皇天上帝ヲシテ人前ニ昭著ナラシメタルハ、是レ其聰明叡知衆人ニ超エタルヲ以テ、未見ノ上帝ヲ識得スルコト、崇高ニシテ、且明顕ナルニ因ルナリ。

唯其「天」、或ハ「皇天上帝」ノ語義ハ、後儒ガ之ヲ理ナリト解キタルハ、遂ニ古聖賢ガ天ニ對シテ識得セシ所ヲ誤リテ、永ク其眞相ヲ掩没セリ。『論語』「獲罪於天無

所禱也」（八佾）ノ朱註ニ、「天即理也」ト説キタレドモ、之ニ次ギテ「逆理則獲罪於天矣」ト云ヒテ、天ト理ト相矛盾ス［二裏］

ル言ヲ成セリ。故ニ『蒙引』ニハ之ヲ辨ジテ、「天之所以為天者理而已矣」ト為シテ、「若謂只天為理、則註何以必曰逆理則獲罪於天。又何不曰逆理則得罪於理。又何不曰逆天則得罪於天。而本文又何不止曰獲罪於理無所禱也云云」（『四書蒙引』巻五、八佾「王孫賈問曰」注）ト云ヒ、『存疑』ニハ「註、天即理也。此語有病。不如只云天者理而已。方無病。這天還是蒼蒼之天、至論天之所以為天則理而已[3]」ト云ヘリ。斯クノ如ク「天即理也」ト云フトモ、「天者理而已」ト云フトモ、遂ニ二者相矛盾スルヲ免レズ。要スルニ、天ハ則天、理ハ則理ニシテ、混淆シテ一ト為ス可カラズ。天ト［三表］

ハ意思智能ヲ具有シ、天地統制ノ最大權力ヲ保持シテ、下土ヲ照臨スル者、即活潑潑ノ神靈ニシテ、理トハ神靈ノ意旨ニ適合スル所ノ道ナリ。故ニ孔子ハ「無所禱也」ト云ヒテ意識アル者ニ對スル言ヲ用井タリ。若シ只理ノミナラバ、何ゾ之ニ對シテ禱ルヲ得ン。後儒孔子ノ意ヲ推測スルコト能ハズ。故ニ一タビ解説ヲ誤リテ惑ヲ後世ニ遺スニ至レリ。今尊書ニ謂フ所ノ宇宙ノ玄理萬有ヲ創造セシ靈妙不可測ナル神理ト云ヘルモ、皆斯ノ解説ヨリ来リタル者ニシテ、基督教ノ教フル所ノ神造物主ト全然解釋ヲ異ニセリ。然レドモ本［三裏］

来儒教ノ所謂天或ハ皇天上帝ハ、決シテ基督教ノ教フル所ト矛盾スル者ニアラズシテ、直ニ之ト相合フベキ者ナリ。蓋僕ノ經ヲ解クハ決シテ前説ヲ襲蹈セズシテ、直ニ古聖賢ガ天ニ對スル觀念ト接觸ス。想フニ古聖賢ガ天ニ對スル觀念ハ、此ヲ以テ意思智能ヲ具有シ、天地宰制ノ權力ヲ保持スル者ト為シテ、或程度マデハ神造物主ヲ推測スルヲ得タリシナリ。然ラズンバ、『詩』ニ「蕩〻上帝、下民之辟。疾威上帝、其命多辟」（大雅、蕩）或ハ「有命自天、命此文王」（大雅、大明）、或ハ「誰此文王、小心翼〻。昭事上帝」（大雅、大明）、或ハ「上帝臨女無貳爾心」（大雅、大明）、或ハ「文王涉降［四表］

在帝之左右」（大雅、文王）、『書』ニ「上天孚佑下民、罪人黜伏」（『尚書』商書、湯誥）、或ハ「惟天監下民、典厥義」（『尚書』商書、高宗肜日）、或ハ「夏氏有罪予畏上帝」（『尚書』商書、湯誓）ト云ヘル如ク、安ゾ知覺ヲ具有セザル理ヲ指シテ活動自在ナル者ノ如ク言フヲ得ン。朱子モ他處ニハ「上帝天之神也[4]」或ハ「上帝天之主宰也[5]」ト云ヒ、程子モ「天下之賢人皆上帝之臣也[6]」或ハ「以其形體謂之天、以其主宰謂之帝[7]」ト云ヘルヲ見レバ、古聖賢ガ識神ノ程度ト均シキガ如クナレドモ、他ノ一面

ニ於テハ天ヲ指シテ理ト為スガ故ニ、其神ト云ヒ主宰ト云フモ、畢竟其行動ノ神妙不可思議ナルヲ見テ神ノ如ク主宰ノ如シト為スニ過ギザルナリ。古聖賢ガ上帝ト行動ヲ共ニセシガ如キニアラズ。是ノ故ニ僕ハ經ヲ讀ミテ、古聖王并ニ孔子子思ノ諸聖賢ガ如［四裏］

何ノ程度ヲ以テカ神造物主ニ接近シ居ラレシカヲ想ハズンバアラズ。此等ノ諸聖賢ハ、智明ニ識高シト雖、如何セン有限ノ人智ヲ以テ無限ノ神明ヲ推測スルガ故ニ、譬ヘバ、遠山ヲ雲烟糢糊ノ際ニ望ムガ如ク漠然トシテ景仰スルニ過ギズ。其命ト云フモ、亦榮枯盛衰禍福得喪ノ迹ニ鑒ミテ、天意ノ行ハルル所ヲ揣量スルノミ。天人密接ノ関係ニ至リテハ皇天上帝ノ活言ヲ以テ明示セラルルニアラズンバ、之ヲ説明スル權能ヲ有セザル者トス。故ニ僕ハ古聖王孔子子思等諸聖賢ノ天ニ對スル觀念ヲ以テ他ノ儒流ノ見ル所ヨリモ一層神造物主ニ接近シタル者ト為スト雖、其道ヲ行フ大任ニ至リテハ、ニコライ大主教ノ説キタル如ク［五表］

人ヲ神造物主ニ就カシムルニ至ルマデ指導ノ職ヲ盡シタル師傅ナリト見ルナリ。其未達セザル所ヲ補フルニ、完全無缺ノ真教ヲ以テスルハ、實ニ是レ儒教ノ本旨ニシテ、古聖賢ガ向上ノ觀念ニ逆ハザルナリ。

『孟子』曰ク、「天與之者、諄〻然命之乎。曰、否。天不言。以行與事示之而已矣」（萬章上）ト。天ノ行為ハ固リ此クノ如キナリ。然レドモ、若シ或ル至大至要ナル天人關係ノ道ニ於テ天親ラ言ヲ發シテ、己ノ如何ナル者タルカヲ示シ、親ラ人ニ誡命ヲ授ケテ何事カ是レ天ノ旨ニ適フ行爲ニシテ、何事カ是レ其ノ意ニ悖ル罪業ナルカヲ開示シ、言語ヲ以テ行為ヲ以テ、親シク人間ニ接近シテ人生至［五裏］

福ノ道ヲ指導スルコトアリトセンカ。何人カ此ノ上天直示ノ明命ヲ奉行シテ、曾テ儒教ニ於テ識得セシ所ヲ満足セシメザラン前ニ、不言ノ天ニ對シテモ、尚畏敬セシ者ハ、焉ゾ其活示セシ所ノ垂訓ヲ傾聽シテ信従セザラン。今試ニ吾ガ基督教ニ就キテ其教フル所ヲ聽カレヨ。全智全能ヲ具有シテ宇宙ヲ統制スル所ノ惟一ノ神造物主ノ事、及ビ其誡命訓辭、天地創造ノ事、人類生死ノ理、人性善悪ノ解、神子降世ノ奥義、救贖赦罪ノ成立、世界ノ終末、靈魂不死ノ辨、人間死後ノ運命等、未曾テ儒教及ビ其他ノ教ニ於テ解明セラレザリシ問題モ、一〻聖書ニ依リテ教示セラルルヲ得。［六表］

是ニ於テ始メテ儒教ノ基督教ト相悖ラズシテ其未天ノ奥秘ニ達セザルヲ知ラン。　尊書又儒教ニ於テ神ナル大問題ヲ閑却セシニアラザルヲ言ヘリ。固リ然リ、唯其天啓ノ教ニ非ルヲ以テ、天人相關ノ奥義ヲ説明スルコト能ハ

ズ。故ニ他ノ完全ナル教法ニ須ツ所アルナリ。

尊書ノ第二問ハ、ニコライ大主教ガ演説中ニ儒教ニ於テハ我等地上ノ事ヲ察セザレバ、如何ニシテ天上ノ事ヲ究メントノ意アルコトヲ述ベタルニ對シテ、孔子ガ何人ニ對シテ發セシ者ナルカヲ問ヘリ。固リ『論語』及ビ他ノ書中ニモ斯ノ語ナシ。是レ「未知生焉知死」（先進第十一）ノ語ニ因リテ之ヲ意解セシノミ。夫ノ季路ノ問目［六裏］ニ對シテハ、邢疏曰「孔子言、尚未知生時之事、則安知死後乎」（先進十一「季路至知死」疏）、『辨疑』云「仲尼之道、不出於人倫彝則之閒、未聞教人幽明次序、必須知死也」（『四書辨疑』巻六、先進「季路問事鬼神云云」注）ト。斯ク生トハ生時ノ事ヲ言フ故ニ、地上ノ事ト云ヒ、死トハ死後ノ事及ビ死ノ理由ニ屬ス。是レ固リ人閒知ルベカラザル事ナリ。故ニ天上ノ事ト云ヘルナリ。孔子ガ教ヲ説クニ、常ニ門弟子ノ理解力ノ程度ニ循ヒテ取舎シ給ヒシハ言フマデモナキ事ナガラ、斯ノ一條ニ至リテハ、實ニ孔子モ亦知ルヲ得ザリシナリ。若シ「孔子ハ至聖ニシテ知ラザル所ナシ、死後ノ事及ビ死ノ所以モ亦之ヲ知レリ。唯妄ニ説カザリシノミ」ト云ハヾ、是レ虚辭ヲ以テ孔子ヲ過稱スル者ニシテ、反リテ先聖尊崇ノ道ニ［七表］アラズ。固リ斯ノ語中ニハ孔子自ラモ知ラズトノ事ハ言明セラレズ。唯季路ニ死ノ知ルベカラザルコトヲ教戒セラレシナリト雖、自ラ是レ知ルベカラザルコトナリトノ意ヲ含有セリ。故ニ陳群曰「鬼及死事難明語之、無益故不答也」（『論語集解義疏』巻六「敢問死」注）ト。此レ其意ヲ得タリ。

以上陳ベシ所ハ、私説ノ大要ナリ。僕ガ儒門ヨリ出デテ基督教ニ信従セシ眼ヲ以テ二教ヲ視ルコト斯クノ如シ。想フニ誤ラザラン。顛ハクハ　尊臺基督教ノ教フル所ヲ究メテ真理ノ存スル所ヲ求メラレヨ。其レ必思半ニ過グル者アラン。ニコライ大主教モ亦　尊書ヲ讀ミテ文辞ニ禮節アルヲ歎賞シテ淳良［七裏］誠實ノ儒家ナリト為シ、為ニ明答ヲ呈センコトヲ囑セラルルコト深切ナリ。併セテ此ノ意ヲ諒セラレンコトヲ乞フ。ニコライ大主教ハ更ニ　貴下ノ芝眉ニ接シテ説明センコトヲ命ゼラレタレドモ、先書ヲ以テ荅フルコト是クノ如シ。爾来多事ニシテ其日ヲ遲クセシヲ恕セヨ。奉状不宣。

五月十三日

注

（1）「1906（明治39）年京都教会の主教に昇叙，日本伝道会社の補佐として翌年3月再来日、ニコライの後継者と期待さ

れたが6月病気のため帰国」（日本キリスト教歴史大事典編集委員会『日本キリスト教歴史大事典』「アンドロニク」条、教文館、一九八八年、七七頁）。なお、「返信2」によれば、帰国は六月一二日となる。

（2）大阪大学付属図書館懐徳堂文庫蔵。

（3）「朱註、天即理也。蒙引解得最好。愚當初正有此疑。細観此語、還是有病。虚斎亦覚費力。不如只云、天者理而已。方無病。這天、蒼〻之天。対奥竈言也。至論天之所以為天、則理而已。語録説得最好」（『論語存疑』巻四、八佾「王孫賈問曰」注）

（4）「皇大也。上帝天之神也。程子曰、以其形体謂之天、以其主宰謂之帝」（『詩経大全』巻十一、小雅、節南山之什、正月）に依ったものか。また、「朱氏曰、皇大也。上帝天之神也。以其形体謂之天以其主宰謂之帝」（『呂氏家塾読書記』巻二十）、「朱曰、皇大也。上帝天之神也。以其形体謂之天、以其主宰謂之帝」（『段氏毛詩集解』巻十九）などは全て朱子の言とする。

（5）「周問、獲罪於天。……故曰、其体即謂之天、其主宰即謂之帝」（『朱子語類』巻第二十五、論語七、八佾「与其媚於奥」章）

（6）『論語集註』に、「天下之賢人皆上帝之臣也」（『論語集註』堯曰第二十「簡在帝心」注）とある。

（7）「或問天帝之異。子曰、以形体謂之天、以主宰謂之帝、以至妙謂之神、以功用謂之神鬼、以情性謂之乾、其実一而已、所自而名之者異也。夫天、専言之則道也」（『河南程氏粋言』巻